快進撃の河童『河次郎』誕生秘話

福崎町地域振興課　小川知男

「小川さん、あなたそういうの好きでしょう。よろしく。」

にっこりと笑いながら帰って行きはる町長を見送りながらしばしタイムカードの前で時間を止めておりました。

平成二十五年に新しく出来た部署「地域振興課」へ異動辞令をもらってすぐの四月三日のこと。目の前にある福崎町独自の補助金『自律（立）のまちづくり交付金』の準備に追われながら一日の業務を終えてタイムカードを押そうとしていたところで町長に捕獲され、

「そうそう小川さん、辻川山公園にため池があるでしょう」

「はい、ありますね」

「あの池はいろんなことを試してみたんだが、一向に水がきれいにならない」

「はい」

「そこでだね、それを逆手にとって河童を池から出せないかなと考えているんです」

「ほほう、それは面白いですね」

「小川さん、あなたそういうの好きでしょう。よろしく」

「は？・・・・はい」

スタスタスタ

「・・・・。」

確かに嗜む程度に造形はやっておりましたが、そんな福崎町の辻川山公園に設置するような大それたものを私が造っていいのか、いや、造れるのかと。私が造るよりも偉い彫刻家の大先生になんか凄いモニュメントこしらえてもらって、これは過去と未来の人類の英知を表現しておりまして―みたいなことで丸く収めてもらった方が良いのではなんてことを考える始末でして、帰宅する車の中では町長の言葉がぐるぐるぐるぐる、

「河童？町長本気やろか」

と車のハンドル相手にブツブツ申し上げるわけですよ。

そもそも河童などというものはいろんな説が全国に存在いたしますが、実態があるわけではない。造形するにあたってモデルはある方が良いわけで、家に帰ってからも腕を組み、粘土の塊を前にしてうんうん唸り、さてどうしたもんかと小一時間。

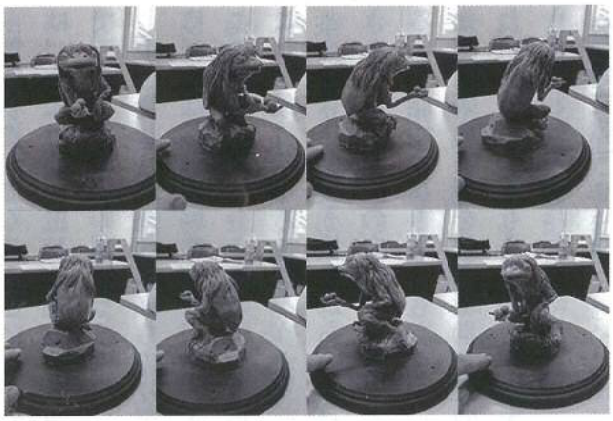
真っ先に浮かんでくるのは福崎町のキャラクター、河童のフクちゃんサキちゃんでしたが、はたしてあの二体を池から出して訪問される方の反応はどうだろう。同じ造るのであれば、出来るだけ多くの人を集めたい。フクちゃんサキちゃんでも悪くはないが、少々パワー不足感があるようなないような。

いまやどこの市町村でもゆるキャラが存在する中、その期待を裏切り、あえてむちゃむちゃ気持ち悪いものを造ればどうだろうと思いついた午前二時。

きっとこの話を私に託した町長の脳内では十中八九フクちゃんサキちゃんが池から現れ、手をつないだ家族連れがほほえましく笑う姿が映っているであると思われるけれども、きっと怖くて気持ち悪い方が人は話題にするだろうと思ったわけです。

難しい心理学などは分かりませんが、人間はなぜか「怖いモノ見たさ」という感情を装備しておるようでございまして、実際私も同じ。お化けは怖いけどちょっとだけ見てみたい。じゃあ決まった、気持ち悪い河童で行くぞ、もう止めたって遅いんだから！そう決めた瞬間から作業はフル回転。ＮＳＰという造形用の粘土で自分勝手に「河童ってこんな感じだよ、多分そうだよ」と想像しながら二時間くらいでざっくり形を決めました。

尻子玉を持って岩の上に座る河童。いいじゃないか。この日本全国を席巻する勢いのゆるキャラ人気に宣戦布告だこのやろうと思い残すことなくぐっすり眠れたわけです。



当初の河童のラフ造形

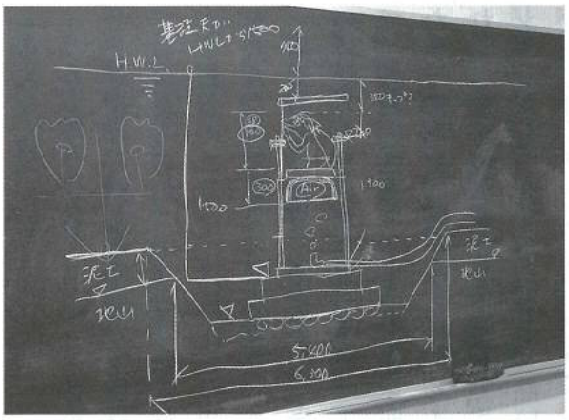
で、翌日「えー、これで行こうと思います」と職場に持って行きましたところ、

「え？なにこれ？」

「こんなん置くの？」
「バカも休み休み言ってずっと休め」
と、それはもうある程度の予想はしておったものの、マグナム級の台風がご到着のような、はるかに予想枠を超えた反対意見の暴風警報。
当然のように皆、池から出て来るのはゆるキャラだと思っていたようで、五四〇度あさっての方向を向いた私の造形には眉をひそめてしまわれ、さすがの私もひょっとしてミスジャッジしてしまったかと、熱いソウルも軽くブレてしまいそうに。
でもきっと考え方は間違っていない、重要なのはハートだハート。つまんない顔色伺いや萎縮で自分の創造性を曲げちゃだめだと自分自身に言い聞かせ、絶賛「気持ち悪いコール」開催中のところ耐え難きを耐えて話を前に進めたわけです。
最終的にデザインには首をかしげられながらも、町長まで決裁をいただき、具体的にGOのサインが出たわけですが、正直なところ何から手を付けたら良いものか分からないんですね。造形自体は出来たものの、じゃあここから先、一体何から始めたらいいのか。町の登録業者一覧を開いて見ましても「河童を池から出したり沈めたりする業者」のインデックスはどこにも貼って無い。誰かが道を造っていてくれれば、そこを歩けば良いだけの話で、スキップしようがトボトボ行こうが自分次第というところですが、これは何よ、道造るところから始めなきゃだめじゃんと目の前に広がる広大な大地を見て立ちすくんだわけです。
しかしまあとりあえず何かしらアクションを起こさないといけないと、色々教えていただいているプロ造形師の先生に連絡をとってみたんですね。先生はかつてゴジラの映画のセットや、お化け屋敷のお化けを造ったりしていた方で、そちら方面の情報も得られるであろうと。そうしましたら造形屋というものがあるので、探してみると良いとのこと。「造形屋、造形屋」とうわごとのようにつぶやきながらインターネットで検索すること小一時間。ようやく見つけた造形屋。なんと兵庫県のマスコット「はばタン」も造っている実績あり。接触するしかないとお電話差し上げたわけです。
「もしもし、兵庫県の福崎町です、河童を池から出そうとしてまして」
「・・・・フフッw」
まあ大体そんなもんでございます。漏れなくコイツ何言ってんの？みたいなご反応。詳しくお話しておりますと、造形屋さんもそのうち「何だと、それおもしろそうじゃないの」と乗り気なご様子でして、その後お店の方へ河童の原型を持ってお伺いいたしますと、「実に楽しそうなお話だ、是非やらせていただきたい」とご快諾いただいたわけです。
これで造形屋さんは大丈夫、しかし池から河童を出す装置はどこにお願いすればいいか。知り合いに聞いてみても帰ってくる言葉は「無理」の一言。右も左も「無理」「無理」「無理」。いよいよこの話も頓挫してしまうのかと希望の扉を閉じかけた時、現れてくれはりました。おお神よ。電気製品工場などで動く生産ロボットを造っていらっしゃる会社でして、「今はすぐに思い浮かばないけれど、みんなで考えましょう」なんて言われて涙チョロリ。こうして福崎町の河童製作特別実行部隊は結成されたわけです。
さて実行部隊結成後、真っ先に直面した問題は、河童を「水の中で動かす」という部分。陸上での動作であれば難なく解決できる方法が、水の中という制限があることによって様々な方法が使えなくなってしまうんですね。
まず錆びるということ、次にいつでも好きな時に部品の取り換えなどのメンテナンスが出来ないということ。つまり設置したら少なくとも半年はそのまま放置していても機嫌よくシュンシュン可動しなければならないんですね。
はたしてそんなことできるんだろうかとみんなで頭を突き合わせて腐ったキャベツのように唸るわけです。しかしあの某千葉のディズニーランドや某大阪のUSJはそんな装置を、まるで息をするかのように、いとも簡単に水中で動かしているのですから、絶対方法はあるはず。しかしそれは門外不出、こちらはこちらで少ない知恵を寄せ合ってふざけながらも傑作をひねりあげないといけない。
そして最初に提案されたのが、漁師さんが使っている網を巻き上げるウインチでワイヤーを巻き上げて動かしてはどうかという案。いいじゃないですか、予算はいくらくらいですか？
「ごひゃくまんくらいです」
「無理っす！」
正直申し上げまして、この装置が当たるかどうかも分からない、全く初めての試みで、かつそういう大手エンターテイメント企業ではなく人

口二万人弱の自治体がやっているわけです。新規事業で何のフォローもバックアップも無い中で、いきなり五〇〇万円の投資は大きすぎる。あまりにも危険。血税の投入であることを忘れてはいけない。

だめ、もっと安い方法で。二〇〇万くらいにおさえられる方法で！とまたウンウン唸るわけです。結局一週間程度経過したころ、一つの案が出まして、河童を大きな洗面器を裏返したようなものに乗せて、空気を送り込んだらどうだろうと。洗面器には小さな穴を複数開けておいて浮いた後は小さな穴から空気は抜けていき、後は自重で沈んでいく方法だと相当安く上がるんじゃないかと。



スタッフで議論中の黒板

全員両手挙げて喜びまして、これならいける、これなら大丈夫だ、と倒産寸前のわが社に大きな融資が決まったかのように、まさに腐ったキャベツのリニューアル。

方式も決まったところで細かなサイズの打ち合わせや、部品の選定、また河童のディティールをどうするかなどの話し合いが始まったわけですけれども、河童の塗装については絶対に緑だけは避けてくださいと申し上げました。みんなが想像する河童には絶対にしたくなかったんですね。予想通りのものが出てきたとしたら、見る側の期待はシンナーのように揮発性が高く、あっという間に飽きられてしまいますから、良い意味で予想を裏切り続けていかないと人を呼ぶことは出来ないと思ったんです。

ついでに申し上げますと、見る側を飽きさせないもう一つの方法として、出しっぱなしにしない、出してもすぐに沈めるというのもあります。もともと当初の予定では一日に三回、一瞬しか出さず、見れたらラッキーっていう計画でした。出没時間が短いという方法はそれはもう大変不評ですけども、早すぎるじゃないかといっぱい怒って帰りはったお客さんが、翌日また来てカメラ構えてたりとか見かけますと、作戦は成功、ニヤリとしてしまう瞬間でございます。

話は戻りますが、造形の仕上げについては我がままを通させてもらったんです。表面はベコベコしていて、色は映画のプレデターのような感じで、ベージュをベースとしてオレンジとブラックを入れてください、髪の毛は一体型造形ではなく、必ず毛を植える方法をとってくださいなど。

髪の毛については散々揉めまして、いや、何を揉めたかというと造形屋さんがやりたくないとかいう話ではなく、素材をどうするかでして。水中にずっと沈んでいるものに取り付ける髪の毛ですから、耐久性のある素材が見つからなかったんですね。普通に売ってるカツラではエブリデイの水中生活に耐えきれず、千切れてボロボロになってしまうんですよ。これには造形屋さんも随分悩まれたようですが、最終的にこれで行くかとなったのが、黄色と黒のトラローブってやつでして、あれを頑張ってほどいて黒い部分のみを使って植えつけているんです。おかげで水中に沈んだ瞬間ぶわっと広がって気持ち悪さ演出の一つとなっているんですね。

工場で植毛中の河童

ある程度造形の形が出来上がったところで機械屋さんのほうも装置が組みあがりましたとのこと、これが年末でした。四月から準備を始めて実に九か月、いよいよ動作テストをやりましょうという事になったんですけども、正しくテストするには装置を底のフラットな水の溜まった場所に設置して行う必要がありまして、当初小学校のプールを借りてテストをやろうなんて話になってたんですね。小学校からも了解を得て、どうもすみません、ありがとうございますなんて御礼を言ったのはいいけれど、年明けの小雪舞う一月に誰がプールに入るのんと。

「寒いってレベルじゃないよね、痛いよね、死ぬかも知れんよね」

「俺血圧高いから一番危ないですわ」
「ウェットスーツ着たらどうかな」
「ウェットスーツはしみこんでくるからドライスーツならどうかな」
「いくらするの？」
「八万円くらい」
「無理だってー」
「ハァー・・・・」

稼働実験を前にまたしても壁登場。じゃあどうする、何がある、とまた全員ですったもんだとご相談、プールサイドで火を焚いておけばとか、造形屋さんが近所の銭湯の湯船借りれるとか、めちゃくちゃな案が飛び出す中、結局、機械屋さんの工場で河童が装置ごと入る水槽を造って沈めようという話にまとまりました。当然機械屋さんは予期せぬ出費にげっそりしてらっしゃいましたが、もう時間も残り少ない中躊躇している余裕もなくやるしかないわけです。

年明けに水槽が出来ましたというご連絡を受けまして、新年のご挨拶も兼ねて造形屋さんと伺いますと、それは立派な鉄板で出来た水槽が置いてありまして「中に水を入れるために水道の蛇口を開けっ放しにして買い物に行って帰ってきたら溢れてました」とビショビショの床をモップで拭いている機械屋さんの姿。いやあいいものをこしらえてくださいましたねとみんな大喜びなわけです。

河童の像を装置に接合し、天井から機械で釣って水槽に沈めますと、当たり前ですがきれいに収まり、河童はゴボゴボと水中へ沈んでくれました。いよいよ空気をコンプレッサーで送り込んで動作チェックです。スイッチオン。

機械工場でのテストの様子

バンバラバンバンバーンとコンプレッサーは回り、空気が水槽下部に送られ、水面が大きく泡立ち、河童が！・・・・・河童が？・・・・・あれ？河童は？

浮いて来ませんわ。いきなりのトラブル発生。浮いて沈まないならまだしも、浮かないって何よ。当然全員顔面は真っ白、景色は紫色、指先はジンジン音を立て、全身に軽くやってくる震え。ここまで来てるのに、もうこの楽しい装置が多くの人に見てもらえる光景が瞼の裏に映っているのになんで！慌てて引き揚げてどこに問題があったのかチェック。どこだ、どこだ、どこかの部品同士が干渉してる、どこ？と慌てるスタッフ全員。透明ガラスの水槽であれば何処が干渉しているのか外から見て分かるところが、鉄板の水槽ゆえにどこが問題なのかもわからず、恐らくここだろうという部分を一つ一つ直しながら何度もテストを繰り返さないといけなかったわけです。救いはみんなが最後まで文句を言わずに真剣に取り組んでくれたことで、いい歳のおっさんが集まって河童の人形を風呂から上げたり下げたりと、見た目は滑稽な絵ではありますが、それぞれの役割を最後まで責任を持ってやり遂げようとする姿は今でこそ、ここでこっそり申し上げますが、感動していました。

まあ結局、部品の設計し直しなどが発生したものですから、工場テストは一〇日間ほどかかりまして、何とか無事に動作確認終了。いよいよ現地での設置となったわけです。

時系列的に逆転してしまいますが、池は当然水を抜いて土木工事の準備を進めていました。水を抜いて魚を獲ってみたところ、池底の泥の量がすさまじく、一ｍくらい堆積した状態で、このまま基礎を打ってもほぼ確実に沈下するであろうとのこと。今度いつ触れるか分からないため、泥土の浚渫を含めて基礎工事を進めました。

現場の設置はいよいよチームの仕上げの作業なわけで、ああ、これで約一年一緒に頑張ってきたこのメンバーでの作業も終わってしまうのかと思うと少しさみしい気持ちで涙チョロリ。機械の設置も完了、みんなで髪の毛ボサボサの河童を持ち上げて池の中へ運び、ゆっくりと設置。フロート部分にみんなで小さく名前を書いて、みなさん本当に長い間ありがとう、お疲れ様でしたとお別れいたしました。

平成二十六年二月十四日より一般公開とさせていただいたわけですけれども、正直自分の中では一ヶ月で百人くらいの方が見に来てくれるといいなと思っていたんですね。まあ神戸新聞の記者の方も来てくれてはるし、百人超えるかな？超えたら嬉しいなくらいで。

ところが、新聞に載った週末、恐ろしいほどの数のお客さんが来られてまして、おいおい、池から死体でも出たのかとこっちが慌てる始末。

今までこの公園にこれだけの人が集まったことなんか記憶にないわけで、何が起きたのか理解にしばらく時間がかかったくらい大混乱。池の北側にある歴史民俗資料館の職員が来られたお客さんを数えてくれていたんですが、午前中四百人、午後六百人と嘘みたいな本当の話。おかげで隣接する福崎町の特産館「もちむぎのやかた」ではレストランに列ができ、お土産物は売り切れが出るなど嬉しい悲鳴がこだましたようでございます。

いやあ新聞ってすごいねえなんて事務所でのんきにお話しておりますと、私宛にお電話が。ラジオで放送させてもらいたいので電話で出演お願いしますとラジオ関西さんから。

ラジオ？ラジオに出るの？ちょっとちょっと！と大騒ぎ。緊張で軽くえづきながらも初のラジオ出演を済ませ、もうあんな緊張するの嫌だと言ってましたら、朝日新聞さんが来られて、ウェブでも公開するので簡単な短い動画を撮らせてくださいと言われまして、ガチガチに緊張してカメラ前でしゃべったわけです。

朝日新聞に掲載されて動画のことを忘れていたんですが、私がサイボーグみたいになって喋っている動画がYahoo!のトップページに出てますよなんて言われて、一体何が起こっているんだと見ましたところ、朝日新聞さんのサイトに出た動画がYahoo!動画で紹介された挙句、社会カテゴリーでアクセス一位になどなってしまいあの恥ずかしい姿が全国に配信されてしまったわけですね。

その後、今度は関西テレビの夕方のニュースから取材のお申込みが。

「テッテッテレビゆうてますよ！」

「うそやん」

「はっちゃんのあんかーがてれびでやるからかっぱがしゅざいでレロレロ」

「しっかり喋れ」

テレビなんて当然遥か彼方の叶わぬ夢物語、そんな話がこんな平和な田舎町に舞い降りるなど誰が想像しましょう。電話口の「関西テレビのアンカーというニュース番組ですが」の切出しから頭は真っ白、とりあえず失礼の無いように「ハイ。ハイ」と答えておりましたらいつのまにやら取材の日も何もかもご決定という有様で。

夕方のニュースで放送されてからは他の局からも立て続けにニュース番組の取材申し込みが続き、キャストさん、ボイスさん、す・またんさんなど、「ありがとうございます、ありがとうございます」と頭を下げてましたら聞きなれないニュース番組名でお電話が。

「ナニコレ珍百景という番組でして」

「はい・・・ハイ！！？？」

と、とうとう有名バラエティ番組からの取材申し込み。その放送が特番で、珍百景に選ばれた上に、その中でMV珍を獲得するなど、大変良い扱いをしていただき感無量。

振り返りますと、いろんな壁がありましたが、「よくまあここまでやって来れたな」というのと、「よくまあここまで売れたな」が本音でございます。普段の役所業務では何の役にも立たない特技にタイミングよく光を当てていただいたおかげで、自分なりに楽しく仕事ができ、また福崎町を知らない方にも広く知ってもらえることが出来たというのは本当にうれしいなと。また、あの河童には本当にお世話になっちゃったもんですから、機嫌を損なわない様に、今も寒いけれど水に入って手で洗ってやっています。

この先何かやるんですかという質問もたまにいただきますが、色々頭の中で案は練りあがっているものの、やれるかどうかは分かりません。ただ、あの辻川山公園という場所が町民の皆さんにとって、また福崎町へ観光に来られる方にとって心のなごむ楽しい場所でありつづけて欲しいなと願っています。

これからも辻川山公園の河太郎と河次郎をみなさんよろしくお願いします。